あるがままの挑戦

東京大学名誉教授 日本大学上席研究員
牛島廣治（昭47卒）

現在、小児科医として埼玉県新座市にある堀ノ内病院の外来もしていますが、ここではこれまでの大学での研究を中心に述べます。

1972年に東京大学医学部を卒業し小児科に入局しました。当時、小林登教授から新しい小児免疫学の話を聞き興味津々でした。病棟の難治性の子どもの診断と治療を模索する一方、新しく出来た免疫班でダウン症の患者血清中の異種動物に対する抗体を調べることから研究を始めました。食肉市場からウシ、ブタ、トリの血液、魚市場から幾種類かの魚の血液をもらって帰り患者血清とゲル内沈降反応を行い、複数の動物血液（血清）と反応させたことを覚えています。さらに蛍光標識された抗体を用いてB細胞を、羊赤血球を用いてT細胞を、抗原刺激下での培養細胞上清中の特異抗体産生を、また免疫異常の患者と健常者の血液から分離したT細胞・B細胞を組み換えて患者の免疫機能を調べるなどの活動をしました。帝京大学に移ってからも子どもの免疫研究を続けて行なう一方、東京大学で鴨下重彦先生、瀬川昌也先生から指導を戴いたことから、小児神経外来を作らせていただきました。今から考えると東京大学、帝京大学の双方で症例に恵まれました。

もともと理2に入り、たまたま医学科のコースに進学し、卒業後小児科に属し、大学院は出てはいないものの論文博士を取得したと同時に、最初に留学したかったMax Cooper先生（ここは駄目でした）と同じアラバマ大学の微生物学教室のDHL Bishop先生とPolly Roy先生の所に属しました。人獣共通感染症のウイルスで多くは昆虫やネズミなどが媒介するブニヤウイルス科のウイルスの分子診断・分子疫学を始めました。今、日本で話題となっている重症熱性血小板減少症候群がその仲間です。アラバマ大学では世界の様々な国からの研究者と一緒に楽しく研究をしました。わが国に帰ってからの下痢症ウイルス・ヒト免疫不全ウイルスの分子疫学の研究に役立ちました。その後、20名にも及ぶ主として獣医師が両教授下で学びました。Polly Roy先生は2017年秋の大阪での日本ウイルス学会学術集会に招待されました。その際Reunion Partyが開かれました。

帰国した1981年から帝京大学、国立予防衛生研究所（現国立感染症研究所）、東京大学、そして日本大学でウイルス性下痢症の研究を続けてきました。ロタウイルス、ノロウイルスなどが含まれます。即ち「便学」です。両ウイルスが電子顕微鏡で発見されてから約45年経過しましたが、その中で35年以上にわたる分子疫学・診断法の開発・病態・ワクチンを含めた予防の研究をしてきました（文献はPubMedでushijimaｈで検索できます）。タイ、ベトナム、中国、バングラデシュなどのアジアの国々の留学生や研究者がいました。現在も共同研究が続いています。東京大学（医学系研究科国際保健学専攻発達医科学分野）退官後、2回の国際アジア小児感染症研究会、1回の国際アジア母子保健（発達医科学）研究会を医学部3号館で行ないました。日本の研究者以外に帰国した元留学生、日本にいる元留学生、米国などにいる元留学生なども参加してくれました。そこで若い世代の活躍をみることができました（写真は研究会後の記念会）。

この原稿を研究室で書きながら、私と長年にわたり一緒に研究しているS氏に、「いつまで研究生活を続けようか」と問いました。「そんなことを考えるならもっとベンチワークをしたら」と言わんばかりの声が聞こえたように思います。また、その前夜、自宅のパソコンに向かっていたところ発達医科学の若いI氏から、本人の次年度に向けた研究申請書に協力研究者として私の名前がありました。これを行なってくださいということでした。若い人から研究を続けよとの励ましを受け取ったと感じました。健康で、環境が許す限りあるがままの挑戦を続けようと思っています。

＊＊医学部同期のA氏からの伝言を書かせていただきます。A氏は今ご自分の病気と闘いながらも、診療を続けておられます。内容は、小学校入学を1年早くしたら卒業も早くなり就業期間の前倒しになるので労働力の減少を抑えるのに良い。また幼稚園（保育園）、小中高校の学習のだぶりを少なくすれば就学期間を短くできるのではないかというようなことでした。定年の延長、高齢者の就業、外国人労働者の雇用など多元的に考える必要があるとは思いますがA氏の思いを検討することも必要と思います。

第3内科へのオマージュ

日本経済新聞社保健センター所長
NTT関東病院顧問
浦部晶夫（昭48卒）

私は昭和43年に本郷の医学部に進学したが、その年の初頭から医学部に端を発した大学紛争が勃発していて、講義や実習は全くなく、不毛な議論に明け暮れる日々で、挙げ句の果ては同級生同士がゲバ棒で殴り合うような悲惨な状況に陥った。私自身は暴力沙汰からは身を遠ざけていたが憂鬱な毎日であった。安田講堂の攻防戦などを経て昭和44年5月28日に医学部の授業再開となったが、それまでの陰鬱な雰囲気が後を引いて、私の学生時代は思い返してみても楽しかったことが嫌な思い出に掻き消されてしまうように感ずる。

昭和48年に卒業して東大病院第3内科で研修を始めたが、その時から私は大学生活を本当の意味でエンジョイすることになった。昭和50年に第3内科に入局し、血液学を専攻することになったが、小坂樹徳教授、高久史麿教授の薫陶を受けて内科学を広く学んだ。当時の大内科においては、内科各領域の専門家が居並ぶ中で教授回診を受けた。週1回のカンファレンスでは興味深い症例に関して激しい議論が戦わされ、その記録は雑誌「診断と治療」に掲載された。内科の全領域の疾患について議論したことは医局員にとって大変勉強になった。カンファレンスは木曜の夕方だったが、医局はいっぱいになって、座れずに立って聞いている人もいた。

私は昭和52年から54年までニューヨークのローン・ケタリング癌研究所に留学した。患者のことを考えず実験にだけ没頭したことは留学中の得難い経験であった。スローン・ケタリングの向かいのロックフェラー大学には第3内科の先輩の佐々茂先生（昭和36年卒）がおられた。佐々先生はポルフィリン症研究の世界的泰斗であり、私は佐々先生のお引立てにより、ロックフェラー大学にもポジションをいただき、スローン・ケタリングとロックフェラーとを兼任して研究するという幸運に恵まれた。思い返しても有難いことであった。当時は同じニューヨークのコロンビア大学級生で第3内科に入局した川上正舒君と、お互い家族ぐるみで仲しく付き合った。

日本に帰り第3内科に戻ると、小坂先生と久先生に教授が替わり私は血液研究室を奪闘した。東大病院でめての骨髄移植もた。造血因子の臨床が始まった時期に遭多くの治験にも参加忙しかったが大内科気の中で過したのでいことも多かった。旅行、忘年会などは数で随分賑やかだった。

昭和62年に高久先生お薦めで東宮侍医に今上陛下御一家にすることになった。に1度の割で24時務で赤坂の東宮御所直をしたが、その頃反田の関東逓信病院NTT関東病院）から液内科を創設してく頼まれ、帝京大学病院からは血液疾患の見てくれと依頼さ私も40代で若かで片っ端から引受回った。

侍医としては、郷、赤坂、五反田、と4ヶ所を掛持ち同妃両殿下（現天皇

鉄門 いまむかし